

新井中央小だより

No. 307

ホームページ <https://myoko.schoolweb.ne.jp/15020005>メールアドレス myoko.araichuou-es@edu-niigata.ed.jp

2025（令和7）年7月9日

人権を尊重すること、差別を解消すること

今年は戦後80年になります。先月、沖縄戦の戦地であった糸満市で、沖縄全戦没者追悼式が行われました。報道によると、追悼式では、豊見城の小学6年の城間 一步輝（いぶき）さんが平和の詩を朗読しました。その全文をご覧ください。特に下線部を読むと、おばあちゃんが戦争で被害を受けた後、つらい気持ちで戦後生きてきて、城間さんがおばあちゃんの苦しみや悲しさに当事者意識をもって寄り添っていることが伝わってきます。

<平和の詩「おばあちゃんの歌」全文>

毎年、ぼくと弟は慰霊の日に おばあちゃんの家に行って 仏壇に手を合わせウートーをする
一年に一度だけおばあちゃんが歌う 「空しゅう警報聞こえてきたら 今はぼくたち小さいから大人の言うこと
よく聞いてあわてないで さわがないで 落ち着いて 入って いましよう防空壕」

五歳の時に習ったのに 八十年後の今でも覚えている 笑顔で歌っているから 楽しい歌だと思っていた
ぼくは五歳の時に習った歌なんて覚えていない
ビデオの中のぼくはあんなに楽しそうに踊りながら歌っているのに

一年に一度だけ おばあちゃんが歌う 「うんじゅん わんにん 艦砲ぬ くえーぬくさー」

泣きながら歌っているから悲しい歌だと分かっていた 歌った後に
「あの戦の時に死んでおけば良かった」と言うからぼくも泣きたくなった

沖縄戦の激しい艦砲射撃でケガをして生き残った人のことを
「艦砲射撃の食べ残し」と言うことを知って悲しくなった

おばあちゃんの家族は 戦争が終わっていることを知らず 防空壕に隠れていた
戦車に乗ったアメリカ兵に「デテコイ」と言われたが 戦車でひき殺されると思い出ていかなかった

手榴弾を壕の中に投げられ おばあちゃんは左の太ももに大けがをした
うじがわいて何度も皮がはがれるから アメリカ軍の病院で
けがをしていない右の太ももの皮をはいで 皮ふ移植をして何とか助かった

でも、大きな傷あとが残った 傷のことを誰にも言えず
先生に叱られても 傷が見える体育着に着替えることが出来ず 学生時代は苦しんでいた

五歳のおばあちゃんが防空壕での歌を歌い
「艦砲射撃の食べ残し」と言われても 生きてくれて本当に良かったと思った

おばあちゃんに 生きていてくれて本当にありがとうと伝えようと 両手でぼくのほっぺをさわって
「生き延のびたくとう ぬちぬ ちるがたん」 生き延びたから命がつながったんだね とおばあちゃんが言った

八十年前の戦争で おばあちゃんは心と体に大きな傷を負った その傷は何十年経っても消えない

人の命を奪い苦しめる戦争を二度と起こさないようにおばあちゃんから聞いた戦争の話を伝え続けていく
おばあちゃんが繋いでくれた命を大切に 一生懸命に生きていく

太平洋戦争の沖縄戦でけがをして苦しみ、その後は「艦砲射撃の食べ残し」と言う人々が使う言葉を聞いて心に傷を受け、その傷のことを誰にも言えずに傷を受け、その傷（体と心の傷）が何十年経っても消えないという表現を読んで、心が痛みました。おばあちゃんは、戦後周囲の人の目を気にして生きてこられたからです。

「人権を尊重すること、差別を解消すること」は、当校で日頃子どもたちに伝えていることで、そのことを目指して、授業や活動を行っています。上記の「平和の詩」のような事象を取り上げ、子どもたちに考えさせ、どう行動すればよいかを考えたり、いじめや差別が起きる社会の構造を、子どもを育てる私たち大人がしっかりと認識し、子どもたちに分かりやすく伝え、地域全体で差別や偏見を無くす社会づくりに努めたりしなければなりません。差別やいじめをなくすために努力するのは、差別やいじめを受けた人ではなく、差別やいじめをする人や差別や偏見を生み出す社会で生きている私たち大人です。そして、差別を解消するために、人権教育、同和教育を全教育活動で、社会全体で繰り返し行っていかなければなりません。